経営学の基本テキストはコレだ！ CROSS REVIEW 2

井原久光
『テキスト経営学［増補版］基礎から最新の理論まで』
ミネルヴァ書房（2000年）
本体価格3,200円

沼上幹
『組織戦略の考え方 ―企業経営の健全性のために』
ちくま新書（2003年）
本体価格700円

今井雅和

同書は経営学のデパートといえるかもしれない。経営理論の変遷と経営組織論を中心として、企業論、戦略論、さらには財務管理論等々、経営学の主要領域をほぼカバーしている。経営学関連の資格試験のテキストとして評価が高い理由も納得できる。経営学全般の知識の習得を目的とする、経営学の講義科目のテキストとして最適である。ただ、さらに知識を深めるためには、各領域（例えば、経営戦略論など）の専門書に当たる必要がある。

同書は教科書というよりは、エッセイ集といった方が適当かもしれない。前半部分は、官僚制や欲求階層説などを、よくある表面的な解説ではなく、経営学の研究蓄積を踏まえた奥深い議論によって、原点に戻って再考することの重要性を教えてくれる。後半部分では、「失われた10年」以降散見される企業組織の機能不全の分析と処方箋を、やや強い調子で提示している。ビジネスマンや公務員にも薦めたいし、学生諸君には経営と組織の面白さに触れるための副読本として読んで欲しい本である。

藤本哲

経営学の授業の組み立て方として大まかに二種類ある。学問の発展段階を順に追っていくのがいいのか、分野毎にやっていくのがいいのか、一概には決められない。この本はいいとこ取りをしているな、というのが初めて読んだときの感想だった。バランスのとれた良い教科書だと言える。それだけではなく、理論や研究の詳しい紹介をしていて、理解の促進を助けている。個人的には理想の教科書に近いと思う。

官僚制組織は悪い組織の典型だと一般的には思われている。しかし健全な官僚制組織は効率的な業務遂行と創造性発揮のために必要不可欠であると、この本は冒頭で述べる。「やるべきことを、きちんとやることが難しいのだ」ということを時々見聞きする。流行の経営用語に飛びつくよりも、昔からいわれている基本的考え方や、自分自身の実感に素直に、愚直に取り組むのが正しいように思える。力強いつかみ、平易な表現で、一気に読める。

関根雅則

経営学の幅広い領域をカバーした本です。４編構成になっており、第１編では企業論、第２編では経営学説史、第３編では組織論、第４編では個別の経営理論（経営戦略論、マーケティング論、生産管理論、財務管理論など）を取り上げています。経営学の全体像や関連領域を把握するのに適した１冊といえるでしょう。また、多様な理論が登場しますので、大学において研究すべきテーマを発見する一助になると思います。ゼミの選択にも役立つのではないでしょうか。

そもそも組織とは何であるのかについて考える機会を提供してくれる本です。組織には様々な形態が存在しますが、それぞれ一長一短があり普遍的な組織形態というのは存在しません。本書は、従業員がどのように行動すると組織が機能するのか、あるいは、逆に機能しないのかをわかりやすく示しています。おそらく大抵の人は何らかの組織に属していると思います。自分の所属する組織と照らし合わせながら読み進めると納得させられるところがたくさんあります。